

右舷灯

1976年に「日本の旅客船」という本を自費出版し、これが筆者の最初の著作となった。日本国内で活躍する客船の姿を網羅的に紹介した写真本で、この出版のため日本内航客船資料編纂会という同好会を立ち上げて仲間を募り、写真撮影、編集作業を続け、船の大好きな印刷屋さん

の協力も得て出版にまでこぎ着けることができた。もう40年余りも前のことである。

さて大学を定年退職して比較的自由の身になり、全国の船に会うために旅に出ることも容易になったので、再び「日本の旅客船」を編纂してみる気になった。その理由のひとつが毎年発行されていた「フェリー旅客船ガイド」が廃刊となって、全国

で活躍する旅客船の近況の把握が難しくなったこと。インターネットの時代になり紙媒体の時刻表のニーズがなくなったかもしれないがなんともし救済しい。このガイドのページを練っていると、写真は載っていないものの旅客船の姿が頭に浮かび、新しい船名に出会うと「いつか必ず会いに行こう」と思った。

日本の旅客船

さて、改めて「日本の旅客船」の編纂に取り組み始めたものの、取材と編集には時間がかかり、その間に新しい船が登場しては入れ替え作業が際限なく続く。そこで、数冊に分けて編纂することにした。その第1弾として「高速旅客船」、そして第2弾として「クルーズ客船&長

今第3弾の「短距離航路客船」のための取材に飛び回っている。この第3弾では離島航路も多く、たった1隻の船に会うために1泊2日の旅になることもたびたびで、取材のコストパフォーマンスは悪いが、地元のを楽しみ、住民、乗船客として船員の話聞くのはいつも新鮮で、人々の生活と船が直結していることを実感できる嬉しい時間だ。

しかし離島航路船の多くが、深刻な過疎化の影響で利用客が減少しているため老朽化しても代替が難しい場合が少なくない。世界規模の経済の大動脈と言えるシーレーンだけでなく、全国津々浦々に張り巡らされているシーレーンも大事な毛細血管であり、その高質な輸送機能の維持に知恵が必要とされ

(池田良穂)